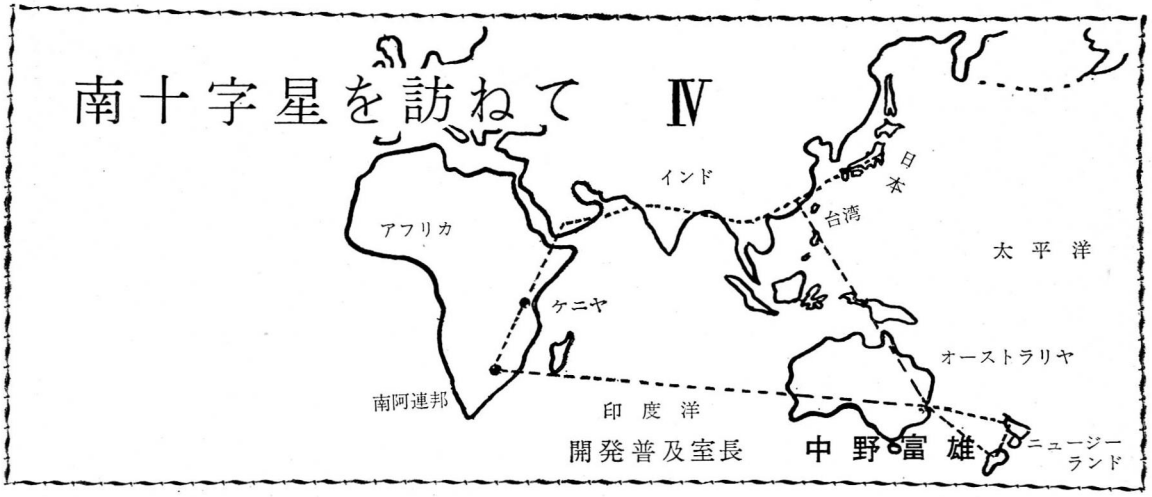
南十字星を訪ねて Ⅳ



開発普及室長　中野富雄

アフリカへの第一歩

12月2日夜，豪州シドニー空港を離陸したカンタス航空機は，豪州大陸を横断，5時間後に西海岸のパースに着陸，給油ののち，南アフリカへの印度洋上約10時間の飛行に飛び立った。

シドニーから乗った乗客には黒人が多く，いよいよアフリカ近しを感じさせる。隣りの客はアフリカ西海岸のセネガルからの留学生で，シドニーの大学を卒業して，今，晴れの帰国をするところであった。帰国したら学校の先生になり結婚するという。黒光りする皮膚，ちぢれた頭髪――それは「暗黒大陸」の名を思い出させる黒人の姿であるが，青年の目は澄み，語る英語は希望に満ちた声音（こわね）であった。

アフリカはアジアにつぐ大陸で，総面積は3,000万km²，日本の約100倍の広さである。人口は約4億，赤道を中心として南北にまたがり，北には広大な沙漠をかかえ，南には高原からなる未開の土地が連なっている。長い文明からの隔離とヨーロッパ人の支配下から離れ，戦後約40の国家が独立，暗黒大陸の夜明けが訪れたが，多種多様の人種と宗教，白人支配下における文明への立ちおくれ，そして貧困と人口過剰問題をかかえて，様々なニュースを世界に投げかけていることは周知のとおりである。

サハラ沙漠とピラミッド，ジャングルと猛獣王国，金とダイヤモンド，そして餓えた黒人の群といったイメージから，今やその広大な土地，かくされた資源そして豊富な労働力により，アフリカは世界の注目を浴びるようになった。

今回の旅行には，そのアフリカの一端にふれ，熱帯圏下の畜産と草地を視察する目的も含まれていた。もちろんこの広大な全域を訪ねることは許されない。10日間の日程の中では，南アフリカ共和国及びケニヤの首都とその付近を視察するだけで精一杯であった。

12月3日は印度洋上で明け，早朝，絶海の孤島モリシャス島の空港に着陸，給油した。世界地図では点にすぎない小島だが，高い山が連なり，椰子の繁みが見え，いかにも南海の島である。1時間の休憩ののち，モリシャス島をあとにして，機は一路西にむかい，やがてマダガスカル島を横断した。日本より大きいこの島も，上空からは，白雲の縞模様に覆われて青くかすんでいた。

時差の関係から，朝が非常に長い。修正時刻の8時頃，初めてアフリカ大陸の海岸線を通過した。緑色と褐色の模様を画く大地がユルユルと眼下を流れてゆく。初めて見るアフリカ大陸であった。

8時30分，南アフリカ共和国の北部に位置する金鉱の都会ヨハネスブルグ郊外のヤン・スマック空港に着陸，兼松社の尼崎氏に迎えられて，首都プレトリヤへ車をとばした。

南アフリカ共和国は，アフリカの最南端を占め，金とダイヤモンドで有名だが，もうひとつ，白人の支配下にあって有色人種差別政策（アパルヘイト）でも悪名高い国である。

今から500年前，ポルトガル人がアフリカ最南端の希望峰を発見，300年前オランダ人がここに移住，18世紀にはボーア国と称して支配を開始したといわれる。そして金とダイヤモンドの大鉱床が発見されるや，英国が介入し，1889年にボーア戦争がおこり，英国は支配権を握って南阿連邦をつくった。そして第二次大戦後に人種差別政策を強行，オランダ系アフリカーナと英国系ブリト

ンの対立から，反英政策がとられ，10年前に南アフリカ共和国として独立したいという歴史を持っている。

面積は日本の約3倍，人口は1,800万人であるが，僅か350万人の白人が，高い生活水準を保つために差別政策をとり，世界の批難を浴びているが，気候は赤道の南に位置し，海抜600〜1,800 mの高原で，暑くなく，しかも一年のうち250日は晴れという太陽に恵まれた国である。12月はちょうど夏の初めで，空港からプレトリヤへのアスファルト道の両側は緑一色であった。

南アフリカ共和国の畜産と牧草

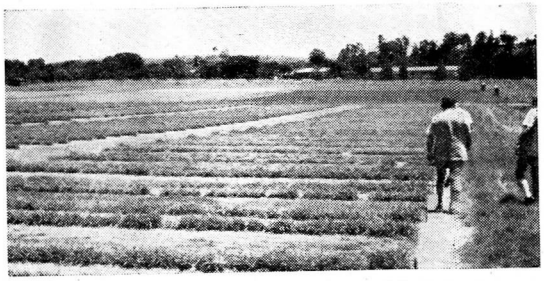
南アフリカ共和国は元来農業国である。原住民の主食はとうもろこしとあわであり，牛・羊・ロバなどの家畜が飼養されている。農業地帯は東にかたより，西はカラハリ沙漠が南北に連らなり粗放な牧畜が営まれている。気候の温和な南部では園芸も発達し，オレンジの対日輸出も最近話題となっているし，また，飼料原料としてのとうもろこしの対日輸出も脚光を浴びてきた。

畜産の主体は，1,100万頭の乳・肉牛，3,400万頭の毛肉用羊の生産で，広い土地に依存する粗放な経営で，東部のサバンナ地帯，西部のステップ地帯の自然草地が利用されている。ここの農業上の問題は相つぐ旱魃である。畜産においても飼料確保上問題であり，政府は耐旱性の草地の改良や飼料作物の導入普及に乗り出し，農業技術省がその指導にあたっている。

首都プレトリヤは丘にかこまれ，ジャカランタの並木のある美しい街である。丘の上からは威厳を示す英国風の国会議事堂が街を見下しており，その一角に農業技術省の種子調整局があった。そこに主任のJ. F. vanWyk氏をまず訪ねた。Wyk氏はオランダ系すなわちアフリカーナである。ナマリのある英語はわかりにくいが，親切に案内してくれた。

話によると南アフリカの草地改良は進行中であり，世界各国から導入した新しい草種調査も未完である。南部ではヨーロッパからのライグラスなど北方型草種が利用され，北部では耐旱性のいわゆる暖地牧草が導入されつつある。

プレトリヤの街（国会議事堂より見下す）



リートンダーレ農業試験場（まめ科草試験圃）

暖地牧草では，中間地帯ではキクユグラス，パスパルム（ダリスグラス），アリキライグラス，ウイピングラブグラスが放牧・乾草用として導入され，北の熱帯圏では自然草に代る耐旱性の草種としてブッフェルグラスやウィピングラブグラスが導入されつつある。サイレージ用としては，とうもろこしが主体であるが，最近は耐旱性のソルゴーが急速に普及した。コロンブスグラス（ソルガム・アルマム）も利用されているが，Wyk氏はアフリカ産のパールミレット・ババーラがソルゴーよりも生産高く，かつ青酸中毒のおそれもないので奨めているという。ローズグラスは耐旱性に乏しく，多雨地域での利用にとどまり，パニカム類やデスモデュームなどは，まだテストの段階である。

種子の生産については，この種子調整局が保証種子の生産を指導し，OECDの種子部門にも加盟しているが，牧草類の保証種子については，ウイピングラブグラス，ブルーパニカム，ブッフェルグラスおよびコロンブスグラスのみが保証種子としての対外輸出可能で，その他のローズグラス，ダリスグラス，ギニヤグラス，ババーラなどの種子は国内需要に応ずるのがようやくとのことであった。

局内の種子検査および種子保存室を見学したが，意外に近代化されているのにはおどろいた。

午後は，同局員L. G. Grobler氏の案内で郊外にあるRietondaleの農業試験場を視察した。ここでは暖地牧草の育種，導入試作および利用試験が行なわれている。ユーカリ樹にかこまれた赤土の試験圃には，パニカム（いね科）とロトノニス（まめ科）の混播草地の牧養力のテスト，パニカム類の新系統の生産力検定，あるいは数々のまめ科草種の調査が行なわれていた。それらは豪州で見たものとほぼ同じであり，やはり種子生産が今後の問題である。

赤いカンナが燃えるように咲いている前庭を横切って，育種主任のL.G.Zyl氏が研究室内を案内し，各種の試作種子の送付を約束してくれたが，はたして日本で役立つかどうかは問題であろう。

帰るとき，圃場の外の野草地に数羽の野生のホロホロ

鳥が餌をついばんでいるのを見かけたのは珍しかった。

夜は市の中心にあるボールバードホテルに泊った。入口に日本の国旗をかかげて歓迎してくれたのは，いささか照れくさい。日本人は白人並みに扱われる。この短い滞在間には不快な場面には遭遇しなかったが，街やホテルで見かける黒人達の何となく活気のない卑下した動きは，いやな思いであった。

12月4日，すがすがしい朝である。南阿にはテレビはない。配達された新聞には，日本の福田蔵相が，日本の経済力は間もなくソ連を追い越すだろうと言明したとか，日本のカラーテレビ不買運動も年末ボーナスで崩れるだろうとか，日本の記事が目立ったのは，南アフリカの日本に対する関心の深さと日本の国際社会における地位とを示すものであろう。

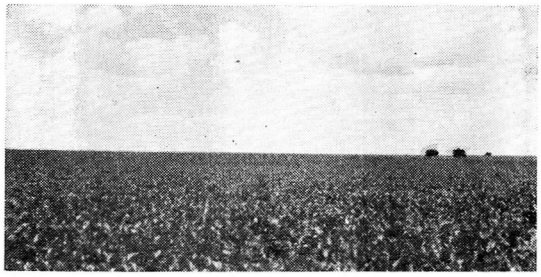
とうもろこしとウイピングラブグラス

朝，地元のスタークアイレス種苗会社のストライドン支店長が迎えてくれて，プレトリヤ郊外の農村を見ることとなった。種子局の普及員 J. C. Wolmarans 氏も同行する。

郊外は広大な高原の連続である。晴れた大空を背景にチギレ雲が流れ，その下に涯しない大地がつづく。壮大な風景である。とうもろこしの生育期で，見渡すかぎりのとうもろこし畑をつきぬけるように車は走る。黒人の運転するトラクターが，まめ粒のようにとうもろこし畑の中に見える。土の家，原色の衣を着た農民の群，アフリカだなあと思う。

南アフリカのとうもろこしは，11〜12月に播き，3〜4月に収穫する。白色コーンが主食であり，国はその改良につとめ，一代雑種が利用されている。最近は食用は漸次充足され，輸出も考慮した飼料用の黄色コーンの生産がふえているという。豊富な日照，広大な土地，そして安価な労力は，より安価なとうもろこしの輸出を促進するかも知れない。

農業の近代化と黒人の低い生活水準，そしてこれを支配する白人達，なにか裏はらな思いがするが，やがて解決すると思われる旱魃対策がすすめば，むしろ農産物の過剰時代を迎えるのも早いのではないかと想像されるのであった。



広大なとうもろこし圃（プレトリヤ郊外）

プレトリヤから約1時間とばしてパワイクラウルのR. J. Rowe 牧場に着いた。彼はブリトン系であるから，英語を話す。波状地400エーカーの経営で，ウィピングラブグラス採種圃140エーカー，90エーカーの放牧草地，30エーカーのアルファアルファ採草地をもち，100頭近くの肉牛を飼っている。ウィピングラブグラスは保証種子の生産で，採種あとを放牧に使用する。種子の反収は20〆程度という。圃場は斉一で，出穂揃期に達しみごとに波打っていた。Rowe 氏はなかなかの精農家の由，肉牛と採種を組み合わせて，夫婦2人で経営をしていた。ウイピングラブグラスは耐旱性ある永年草として放牧・乾草生産用に利用されてきたが，漸次土壌保全を兼ねた傾斜地の草地造成用に多く仕向けられつつあるということであった。

12月5日，早朝プレトリヤからヨハネスブルグに移動，この金鉱で出来た人口120万の南アフリカ最大の都会に1泊した。市の周辺には金の廃鉱があり，褐色のボタ山が目につく。街の中心は摩天楼が林立し，郊外には高層のアパートが立ち並んでいる。ここでは2つの種子会社を訪ね，翌12月6日夕刻，英国 BOAC 航空の VC 10 ジェット機に搭乗，ケニヤにむかって飛びたった。

ケニヤの農業事情

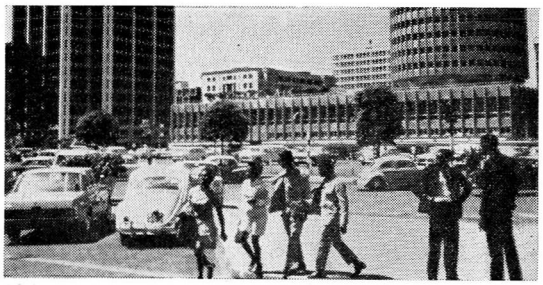
ケニヤは英連邦内共和国である。

赤道直下に位置し，面積は日本の約2倍，人口は約1,000万人である。約500年前，ポルトガル人が渡来，19世紀以来英国が支配して来たが，第二次大戦後，ジョモ・ケニヤッタの指導のもとに民族解放運動がおこり，1960年12月12日，共和国として独立し，ケニヤと号し，ケニヤッタが大統領に就任，アフリカの民族開放の口火を切った。

現在ヨーロッパ系人は4％，インドおよびアラブ系人が30％，原住民はバンツー族，ニロ族，キクユ族，カビロンド族，マサイ族など多くの部族からなっている。国語はスワヒリ語であるが，英語は公用語として通ずる。

赤道直下で四季の変化はないが，大部分が1,000〜1,600 mの標高にあるから，しのぎやすい。その中央に首都ナイロビがあり，飛行機は深夜ナイロビ郊外のエンバシー国際空港に着陸した。日商岩井社の沢田氏の出迎えをうけて，市の中心にあるニュースタンレーホテルに落着いた。

12月7日も底のぬけたような晴天である。1,600 mの高原の朝は冷えびえとしている。まぶしい太陽をあびたナイロビの街は明るく活気にみちていて，ケニヤ人達は



ナイロビの街（右はヒルトンホテル）

色こそ黒光りだが，颯爽と胸を張って大通りを闊歩して，南アフリカ共和国とは大いに趣きが違う。

ナイロビは人口30万人，ケニヤッタ大統領官邸と国会議事堂を中心に広がる近代都市で高層ビルが建ち，熱帯圏の花ハイビスカスやブーゲンビリヤが満開で美しい。街では12日の独立記念日を目前にして飾りつけが始まっていた。

午前中は農務省に主任研究官W. W. Wapakara氏を訪ねてケニヤの農業事情を聞いた。

ケニヤの主たる産業は農業である。農産物の種類は，この国の標高の関係で変化する。すなわち，高地ではコーヒー，紅茶，とうもろこし，小麦，除虫菊など，低地ではサイザル麻，棉花，砂糖きびなどが栽培されている。このうち，コーヒー，紅茶，サイザル麻はケニヤの重要な輸出品である。そして北部および東部の山岳あるいは半沙漠地帯は牧畜地帯となっている。

畜産は全国的に分布していて，肉牛670万頭，乳牛470万頭，羊400万頭，山羊530万頭がその主体をなしている。

ケニヤの農業は零細な自給農業であったが，政府は輸出を対象とした企業農業への転換を進めている。しかし，主食のとうもろこしは需要を充たし，コーヒー，サイザル麻は輸出不振，増産の緒についた砂糖も先行き暗く，今後の農業のあり方が重ねて論議されているようであった。

畜産部門では，自然草地の利用が主体で，背中にコブのある耐暑性のつよいセブ牛が多く，全く粗放な放牧で飼養されている。政府は，草地の改良による畜産の改善をはかり，標高2,500 m以上では北方型草種の利用を，それ以下の地帯では暖地草種の利用をすすめているとのことで，210万エーカーの天然草地のうち，1万2,000エーカーが改良草地に，2万6,000エーカーが飼料作物によって作付されたという。

日本は今，アフリカに目をむけている。東アフリカの開発への協力は，いろいろの形ですすめられている。海外青年協力隊がエチオピヤ〜ケニヤ間の交通網の建設に参加，また，テレビ局初め通信施設の建設にも乗り出している。この滞在期間中にも日綿実業がケニヤ政府と協力して養蚕事業を計画，桑園1万haの造成が話題となっており，また，三菱商事などの日本建設関係9社が，ケニヤでの空港建設の受注をうけたとか，日本のケニヤ進出は目覚ましい。

キターレへの6時間のドライブ

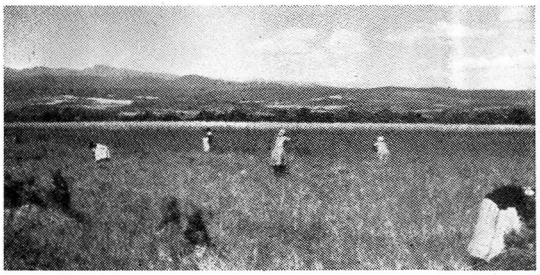
農務省の訪問を終えた午後は，いよいよ奥地に入ることとなった。ナイロビから北へ約300 km，ウガンダとの国境近くにキターレの町がある。ここに国立農業試験場があり，暖地牧草の研究が進められており，かつまたそこでケニヤ種苗会社が種子生産を行なっているので，併せて訪ねることとなった。

交通機関は汽車があるが，2日の日程では無理である。小型飛行機をチャーターできるが片道150ドルでは高くつきすぎる。ケニヤ種苗のクームス氏と電話連絡の結果，乗合自動車を利用することとなった。市内の裏街の煉瓦造りの建物のこみ合った空地が発車場である。黒光りのケニヤ人や褐色のインド人など右往左往する中に，5〜6人乗りのライトバンが数台並んでいる。屋根に荷物をのせて，6時間のケニヤ高原のドライブが始まった。

ナイロビから1時間，やがて3,000 mの大峠をこえると，そこは大峡谷で，見渡すかぎりのサバンナである。遠くウガンダの国境山脈がかすんで見える。褐色に枯れた草原は，点々と灌木が群生し，所々にサボテンの一種である巨大なユーホルビヤが奇怪な姿を現わす。

時々，褐色の肉牛群を見たり，フラミンゴの大群で有名なネイバシヤ湖畔を走り，海抜3,000 mのみどりの牧草地帯では小麦の収穫を眺め，車は60〜70 kmの速度で走りつづける。車内はケニヤ人の体臭でムンムンするが，道路は舗装されているから割合楽であった。

右に5,000 mのケニヤ山を望む頃，真赤な太陽は西方ウガンダの山かげにユラユラと沈んでゆき，やがてそこにそびえる4,000 mのエルゴン山の黒いシルエットが見えなくなり，ようやくキターレに到着した。真暗な町はもう静まりかえっており，迎えもなく，唯一のキターレホテルに泊ったときは，いささか異様な思いにうたれた。



カラードギニヤグラスの採種風景（キターレにて）

12月8日の朝は寒かった。朝食のフライドエッグとベーコンにパパイヤとパイナップルがついた。食べ放題でこれはうまかった。

ケニヤ種苗のクームス氏が迎えに来てくれ，同社を訪問，主食であるとうもろこしの一代雑種種子の巨大な貯蔵庫，近代化された精選工場を見て，暖地牧草種子生産について意見交換をすすめた。同社も本格的な暖地牧草採種には日が浅く，かつ技術的な未解決点もあって簡単に結論は出ないが，ここの立地条件と国の試験場の指導をもとに採種拡大に努めることとなった。

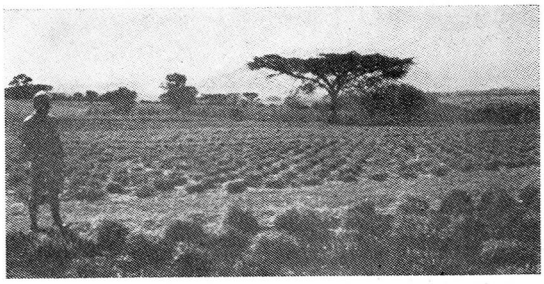
エルゴン山の長い麓野の高原にローズグラス，カラードギニヤグラス，セタリヤなどの採種圃が設置され，今や収穫時期を迎えていた。ケニヤ農民の女達が鎌で刈りとり，たばねて堆にして乾燥している。ローズグラスは良い稔実を示していたが，セタリヤやギニヤグラスはいささか淋しい穂であった。これらの増収対策と機械化はどのように解決すべきか。現在の種子反収は5〜10kgで，量的にも採算的にも問題がありすぎると思った。

ケニヤ種苗の社長ヘイルベース氏はオランダ人である。43年前にここに移住し，ケニヤ人を使ってコーヒー園を経営した。15年前，国の食糧増産政策に添って，とうもろこしの種子生産に手をつけ，最近暖地牧草の種子生産を拡張した。70歳というがカクシャクとして，エルゴン山麓に丸太組みの住宅をつくり，単身で住んでいる。訪ねたときは数人のケニヤ人と共に赤く熟したコーヒーの実を採取していたが，招じ入れられた部屋の四周の壁は本棚で，ビッシリと本がつまれて，そのひととなりが窺われた。ヨーロッパ人には，このように異国に骨を埋めるパイオニヤの物語りをよく聞くが，現実にその人に接して見ると何かうたれるものがあった。パイプをくゆらしながらサービスしてくれたレモンジュースの爽快な味は忘られぬものであった。

キターレ国立農業試験場

この試験場はキターレの郊外，海抜1,860mにある。牧草類の育種，導入検定，種子生産に関する試験，根粒菌の研究，草地生産力の向上に関する試験，ソルゴーの選抜試験，家畜飼養試験などが，その主たる業務である。ここにもブーゲンビリヤが満開で，案内してくれた人は，オランダ人の種子研究官J. C. Boonman氏であった。彼は3年前にオランダから着任したというが，やはり研究の主役は白人が占めているようだ。

品種保存展示圃は100種に余る暖地草があつめられており，大部分は豪州で見たものであるが，テオシントに似たガテマラグラスは珍しかった。育種圃ではローズグラス，ギニヤグラスについて母系選抜による育種がすすめられ，ローズグラスでは新しく，多けつで種子生産多収の株が選抜されており興味深い。ギニヤグラスも1,000個体に余る株が選ばれていたが，極めて変異に富み，これら暖地草には育種の余地が十分あるやに見受けられる。ケニヤの奥地でこのような組織立った作業がすすめられているのを見て，認識を新たにした次第である。



国立農業試験場（ギニヤグラス育種圃場）

ローズグラスにはすでにマサバ，ポコト，バララなどの品種が発表され，それぞれ採種も行なわれている。ブーマン氏はこれらの採種改善の研究もすすめているが，なかなか思うような結果はでず，いずれも反収10〜15kgにとどまっているようであった。すなわち種子の反収がひくいのと同時に発芽率も悪いが，これは天候に左右される以外に，出穂開花が揃わぬため，早く開花したものは早く脱落し，おそく開花したものは未熟であることが原因で採種上の難点解決はきわめてむずかしい。

放牧試験ではローズグラス，セタリヤ，パニカムなどまめ科としてデスモデュームやロトノニス，ケニヤホワイトクローバなどを混播した草地へ家畜を放牧して体重増加を比較していた。ケニヤホワイトクローバは極めて耐暑性がつよく日本での利用が期待される。

ブーマン氏はソルゴーに期待をよせており，アメリカからハイブリッドソルゴーやスーダン・ソルゴーの種間雑種を多数導入して調査しており，放牧草としての価値を認めていた。

試験場の背後の丘の上に小さなワラぶきの小屋が沢山ならんでいる。ケニヤ農民の住いである。全く小屋であって生活程度の低さがうかがい知られるが，彼等は一夫多妻で，妻を買うことができるそうである。従って数人の妻とともに100人の家族を養っているものもあるというから，いささか判断に苦しむ次第だ。

12月9日，今朝も快晴である。朝，食堂に入るとケニヤ人のボーイが近寄って来て「ジャンボ」と挨拶する。オハヨウか，コンニチワであろう。再び，乗合自動車にのりこんで，6時間の山路をナイロビに下った。

アンボセリ動物保護区

ケニヤは猛獣王国として有名でもある 。

ケニヤでの用務を終えて，飛行機便の関係で1日余猶ができたので自然動物園の観光を計画，ヘミングウエイの小説で有名になった標高5,895mで万年雪をいただいているキリマンジャロの麓にあるマサイ・アンボセリ動物保護区を訪ねることとなった。

日商の沢田氏にたのんで車と運転手をチャーターして貰う。朝6時ホテルを出発，濃い雲海の中を一直線につづく高原道路を走る。やがて太陽が昇り，雲海が晴れて，330万㎢に亘る広大なサバンナが展開する。草原の中を赤い道がキリマシンジャロの麓をめがけてつきぬけている。所々に赤土の巨大なアリの塔が見える。

約2時間走って検問所があり，ここで入場料を払う。ゲートを過ぎるとアンボセリ湖の干上った平原は乾き切って，車のうしろはモウモウたる砂塵だ。両側のブッシュの間からまずキリンが目にとびこんできた。車窓から足しか見えぬほど巨大な感じである。つづいて縞馬やウシカモシカの群が車道を目の前で横切る。

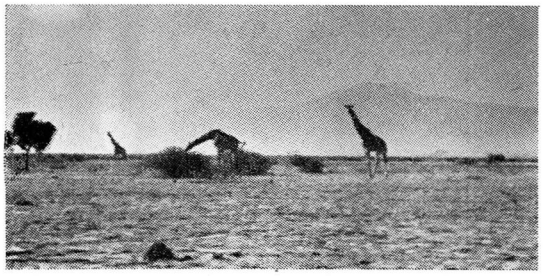
やがて，ロッジと食堂，休憩所のある小部落に着いた。ここでマサイ族のレインジャーを1人傭って道案内をさせる。テーブルツリーの木かげに象，サイ，バッファローが草を喰べているを見つける。サイには白いサイ鳥がついているのが印象的だ。

平原を走るにつれて，カモシカ，ダチョウそしてすばしこい小鹿オリックス，ハートビーストなどが平原を流れるように走るのを見る。ハゲタカ，サルの群，そして，時々乾いた動物の屍体や白骨がころがり，自然の闘争を想像させる。

しかし，猛獣の王ライオンが見えぬ。ライオンとカバを見なければ話にならぬとレインジャーをせきたて，草原や水辺をグルグルと回るがなかなか現われない。

キリマンジャロは巨大なお椀型の全容を現わし，青空を背景に頂上の万年雪が光って見える。強く照りつける太陽はギラギラと眩しく，遠くサバンナの涯はカゲロウが燃えて一面湖のようである。

やがて，ハイエナや野猪が姿を見せ，3mもあるヒョウ紋あざやかなチータがノソリ，ノソリと車に近づいてきて，見物はクライマックスに達した。このとき車の前輪がパンクしたのはまさに劇的であった。しかしながら，ライオンは遂に姿を見せず，アンボセリに別れを告げなければならなかった。



アンボセリ自然動物保護地(背景はキリマンジャロ山)

ここの草食動物はサバンナの草やアカシヤの葉をたべている。したがって，この草原はまた放牧地ともなる訳で，アンボセリへの途中，多数のセブ牛を追うマサイ族に時々出会った。風のない大地をセブ牛の大群がモウモウと砂塵をあげて移動する。その前後に原色の衣をまとったマサイ族がヤリを持って牛を追ってゆく。何か壮大なオーケストラでも聞えてきそうな風景であった。

帰国の旅

12月11日，アフリカの旅程は終った。若いケニヤは明日独立記念日を迎える。この将来に可能性を秘めた国，ケニヤに，ナイロビ空港で別れを告げ，東アフリカ航空機上の人となった。

飛行機はケニヤを北上，地上はだんだん緑が失なわれて砂漠となり，エチオピヤ，ペルシャを経てパキスタンのカラチ，インドのボンベイを経過，タイに入ると再び緑の大地となり，バンコック，香港を経て，台湾までの24時間の飛行機旅行は，全く長い一日であった。

45年振りで訪ね，5日間滞在した台湾は昔と変らぬ印象であった。中共の国際社会進出で微妙な空気はあるが，全体として活気にあふれているように見受けられた。

中央政府の農業指導機関である中国農村復興連合委員会（農復会）の世話になり，台北市内，台中の中興大学畜産学部，台湾省農林庁種苗繁殖場，台南の省立畜産試験場などを歴訪し，台湾の畜産の一端にふれることが出来た。しかし，台湾の畜産は，豚への依存度が高く，乳肉牛の生産は始まったばかりで，余り参考となるところはなかった。飼料作物としては，ネピヤグラス，パンゴラグラス，とうもろこしが主たるもので，暖地牧草も豪州からの導入種の調査が進められていた。

しかし，その豊富な労力と常夏の立地条件は，将来の暖地草種の採種地となりうる要素をもっている。そ菜種子については，日本や米国の種苗会社がすでに進出しているところである。

日本語が通じ，日本風の雰囲気は日本にいるような錯覚をおぼえ，極めて親日的な空気は日本依存を望んでいるかにも受けとられる。

5日間のいそがしい日程はまたたく間にすぎて，12月17日，日本航空機は3時間余りの飛行ののち羽田に着陸して38日間の旅行を終った。

豪州，ニュージーランド，アフリカ――それは日本から見れば地球の裏側の諸国であり，遠い夢の国のような思いが強いが，今や全く身近かなものとなった。そしてその広さ，その資源，その季節差は，あらゆる点で日本の今後に必要となるだろう。　　（完）